

---

# 四聖獸ストーリー

夢夕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

四聖獣ストーリー

### 【著者名】

夢夕

### 【Zコード】

Z9527J

### 【あらすじ】

『あらすじ』

- ・クラスメイトにいじめられ、教師や父親に見捨てられた優記は学校の屋上から飛び降り自殺を図る。しかし、目が覚めるとそこには、見たこともない怪物が待ち構えていた。

### 『1話あらすじ』

- ・屋上から飛び降りはずの優記は、気がつくとケニーという怪物の研究所にいた。

ケニーは優記を使って清龍を再生させようと考へ、優記の体内に清龍の細胞（肉片）を注入する。すると、今まで見たことがない反応をみせ突然爆発。爆発の衝撃でなんとか逃げ出した優記だったが、謎の少年の声によりケニーと戦うことを決意。優記の熱意に清龍の細胞が反応し、右腕が清龍の鍵詰めに変形。ケニーを見事倒すこととなる。

しかし別の場所では、謎の少年とマナリアスが神妙な面持ちで優記について会話していた。そしてその会話の中から、優記が今いるのが元いた世界ではなく、“この壊れた世界”であることが判明する。

## プロローグ

ある学校の屋上。夕焼けに染まる日の中、少女が一人 眼下に広がるグラウンドを見つめていた。

「お前、キモイんだよ！」

「早く、いなくなってくれないかなあ。」

「あのさ、ウザインだけど」

「そいつに近寄らない方がいいよ。菌がうつるから（笑）」

クラスメイトの罵声が少女の頭で騒ぎ立てる。いつまでも止まるこのない、田舎まし時計のベルのように何度も何度も少女を苦しめる。

「もうやめて……！」

少女の瞳から、日に染まった真っ赤な涙が零れ落ちる。

「もうダメ。あいつ達はクラスメイトなんかじゃない。あいつらは悪魔だ！！！」

あいつ達のせいで自殺するんだ。」

夕焼けが沈み、夜が徐々にグラウンド、校舎、そして少女を黒く染める。

「生きていても、いいことなんてひとつもない。生きてたってしょうがないんだよ！！」

力なくそう呟いた少女は、一人その空に向かつて飛び立った。

う・・・ん。

優記は、朦朧とする意識の中、ゆっくりと目を開けた。

「ここは、どこなの？」

そう咳き、一瞬にして全身に緊張が走る。

しかし、そこは学校でも病院でもなかつた。クラスメイトや父親もいなかつた。そこには、見慣れぬ景色が広がつていた。

「理科室？」

初めに優紀の視界に飛び込んできた物は、学校の理科室に置いてあるような長方形の黒いテーブル。

テーブルの上には書類の束、そして何に使うのか分からぬ機材やビーカー や色とりどりの試験管などが置いてある。

「なんなの、ここ？」

恐る恐る、部屋を見渡してみた。

部屋の左側には、大人1人が余裕で入るくらいの巨大なカプセル容器が整然と並んでいた。

全ての容器には、薄緑色の液体が隙間なく詰まつている。しかし、一番奥の容器にだけ、何かが入つてゐる。それは、動物の肉片のようなものだつた。

「なんなの、あれ・・・。」

優記はその肉片をマジマジと見つめた、次の瞬間

「おおー…やつとお田覚めですかねえ。」

不意に声がして、優紀は視線を左右へ泳がせた。

「誰なの？」

優記の問いかけに声の主は不気味に笑い、まるで“隠れんぼ”で隠れているかのように、ひつそりとした声で言った。

「「」ちですよー。」

次の瞬間、優記は目を疑つた。

いつのまにか、“それ”は優紀の真正面に立つていた。白髪でメガネを掛けた30代半ばの男性。医者が着るような真っ白い白衣を着用している。

「嘘でしょ！？なんで・・・」

視線を下に移した瞬間、優記は絶句した。

上半身だけ見れば普通の人間だが、下半身が大きなクモの姿になっている。言つならば、ヘンタウロスの馬の部分が、丸々クモになつてみたいに。

「あらあら、どうしたんでしょうか。

クモを見るのは初めてですかねえ？それとも、わたくしの様なカツコイイ大人の男性を見るのが初めてですかねえ。」

メガネの奥から鋭い目つきで優記を見つめながら、クモ男は声を殺して微笑んだ。

何がなんだかわからず、優記は混乱した頭を必死に働かせようとする。

（私はどうなつてるの？ここはどこ？学校の屋上から飛び降りたはずなのに。なのに何でこんな所に？それにこの怪物・・・クモ男はなに？やばい！..早く逃げなきや・・・）

【ガシャッ】

優記はここでようやく、手錠をはめられている事に気づいた。手錠からは1本の鎖が伸びており、鎖の先には大きな錘おおいのが繋がっていた。

「ちよつ、何これ？」

優記は必死で手首、そして両腕を揺する。

しかし、錐につながれた手錠は 優記をそこから一歩も動かさない。額、全身、そして心の中にまで冷や汗が溢れ出す。

「そんなに驚かなくてもいいんじゃないですかねえ。  
あんな高い崖から飛び下りて、どうせ死ぬつもりだったんでしょ。  
あんな険しい崖、自殺以外には誰も近づきませんよ。もしかたくし  
が助けなかつたら、今頃は見るも無残な姿になつていたと思うんで  
すがねえ。」

怪物の言葉に優紀は考え込む。

「がけ？」

その時、クモ男が歩き出すのが見えた。6本の両足を器用に使い1歩、また1歩と優記に近づいてくる。1歩近づくにつれ、怪物の細部のシワまでハツキリと見えてくる。

そのたびに心が高鳴るのが分かる。

「うーん。見れば見るほどいい肌ですねえ。柔軟性もあるしつやもある。これなら大丈夫かもしれませんねえ。せつかくですからお名前を聞いておきましょう。お嬢さんのお名前は？」

そう言う怪物の手は体のあらゆる部分をまさぐり、目まじりと優記を踏みしていた。

「はっ、はあ・・・はあ・・・」

恐怖のあまり、口が上手く動かせない。

「はい？」

クモ男の顔が更に近づく。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・。」

クモ男はぐいをかしげ、少し考えた後に言ひ。

「まあいいでしょ、名前なんていうものはどうでも。  
大切なのはこの後に行つ実験なのですからねえ。」

「じつ、けんつ！？」

意味が分からず呆然とする優記をよそにクモ男は話を続ける。

「申し遅れました。わたくしの名前は“ケニー・グローリー”でございます。

今回あなたを執刀させていただく、しがない研究家ですねえ。」

自己紹介を終えた怪物のケニーは、優紀に背を向けゆっくりと部屋の左側に置かれた、カプセル容器に歩み寄る。

「ふふふ・・・わたくしは“この世界”的あらゆる物の研究を、この研究所で行っています。わたくしの手にかかるれば、どんな世の中の不思議な謎だって一瞬で解けてしまいます。研究に研究を続ける毎日です。そしてわたくしは近年、大変貴重なものを見つめました。」

ケニーはもつたいぶるよつた含み笑いをして、一番奥のカプセル容器の手前で歩みを止めた。

「それがこの、肉片なのです。」

肉片に目を輝かせながら、ケニーはある少年のようにキラキラと話し始めた。

「四聖獣というのを聞いたことがありますかねえ。お若いあなたでも一度は耳にしているかと思います。

どんな攻撃も一瞬で無効化する、動く鉄壁要塞の玄武。」

優紀の頭の中に重い甲羅を背負った巨大なカメの姿が浮かんだ。

「針に糸を通すよりも正確な攻撃と、数千もの百熱の羽根で相手を確実に仕留める朱雀。」

今度は黄金に輝く鳥の姿が浮かんだ。

「この世のどんな強靭な物でも粉々に粉碎する鋭い牙で、凶暴の限りを尽くす白虎。」

今度は、この世の物とは思えないくらい鋭い爪と牙で相手を威嚇す

る虎が浮かぶ。

もちろんどれも実際に見たことないが、アニメやマンガなどで登場する想像上の生き物、それが四聖獣だ。

ケリーはいつたん話しを中断すると、田の前の大きなカプセル容器を血漿げにコソコソと叩いた。

「そして、四聖獣の中でも最速の攻撃と切れ味を持つといわれている清龍。

ここだけの秘密なんですが、実はこれは・・・その清龍の肉片なのです。」

「・・・清龍？」

優紀の声が部屋に広がるのを無視し、ケリーは急に悲しげな表情になつた。

「清龍に限らず四聖獣という生き物は、生命力も尋常ではないのです。

多少の傷や損傷は一瞬にして自己再生できてしまう。しかしですねえ、この清龍はあまりにも損傷が激しく、自力ではおろか、もはやこの研究所の最新鋭の治癒装置でも再生させる事が出来ません。」

ケリーの瞳から一筋の涙がこぼれた。

「しかし、ここで諦めるようなわたくしではありません!!

わたくしは清龍に新たな肉体を与えることにしたんですねえ。そうすることにより、その新たな肉体を清龍の細胞が支配し、細胞分裂を繰り返し、数ヶ月・・・いや、たったの数日で元の清龍に復活するというわけなんです。」

優記はもう一度手錠を思いつきり引っ張った。ガチャ、ガチャとう音が部屋に響き渡る。

「そんな、おどき話のようなことがあるわけないじゃないですか。それよりお願ひです、私を自由にしてください!!」

「ウルサイヨ！！！」

ケニーは急に口調を苛立たせ、優記を刺すように睨んだ。

「世の中、なかなか理論通りにはいかない。

・・・そのような所が、この世の中のムカツク所なんですがね。

今まで49体の人間やモンスターで実験を繰り返しましたが・・・

・・・全て失敗してしまいましたねえ。受け皿となる肉体は、息つく間もなく燃え尽きてしまうんです。

やはり清龍の細胞は素晴らしいと褒めてあげるべきでしょうか？しかししながら、いい加減ムカムカが噴火しそうなんですよねえ！！！

ケニーの青白い瞳に、怯えきった自分の表情が写っていることに気づく。

（まさか　　）

一瞬にして、優記の頭の中にいくつもの未来が映し出された。しかし、どの未来でも最後は床に転がつたまま燃え尽きて動かなくなつた自分がいる。

ケニーは最後に、微笑み言つた。

「でも、そのムカムカもあと少しで解消されるかもしませんねえ。

」  
ケニーは再び肉片に視線を戻した。

何よりも愛おしいその肉片を眺め、まるで初めてのキスを誘うかのごとく、優しい声で囁く。

「では、手術オペを開始します。」

ケニーはカプセル容器の横に付いていた赤いスイッチを押した。

短い機械音が優記の耳に届く。

【ピッ】

とこう音とともに、緑の液体がじょじょにカプセルから排出されて

「いや。ケニーはそれを嬉しそうに見つめる。

「ちよつ、ちよつと待つてよ。なに?なんなのよ。ねえ、ねえってば――!」

心では無駄だと分かりながらも、優記は必死にケニーに問いかける。（逃げなきや・・・）

誰でもそう思う。しかし、恐怖で体が硬直して動けない。体が言うことをきいてくれない。

「お願い、動いてよ。」「

【ゴ・ポ・ポ・ボ・・・・】

液体は容器の半分を過ぎた。

「お願い。動いて。動けよ!動いてよ!――!」

涙ながらの懸命な呼びかけにも、自分の体は答えてくれない。

【ズズズズズズ・・・・】

ストローでジュースの最後の1滴まで飲み干すような、低く嫌な音が部屋中に響く。

優記の心臓が高鳴る。恐る恐るカプセルに目をやる。そして

「殺される!――!」

そう思つた瞬間、魔法が解けたかのように やつと体が動き始めた。必死に手首を搖さぶり、鎖を何とか引き千切ろうとする。

しかし所詮は一回の女子高生。鎖に敵うわけはない。

「なんで、・・・どうしてなんことになっちゃったの?」

必死に喚く優紀をよそに、液体がなくなつたカプセル容器は【プシュー】と音を立てて中央が開いた。

「おお～!おお～!おお～!――!」

ケニーが歓喜の悲鳴を上げる。まるでもう、実験が成功するのが分かっているかのよつに。

肉片は液体の中に浸かっていた時よりも一回り小さく見え、ミカン程の大きさだった。それをケニーは慎重に自分の右手でつかむ。そ

して今度は、近くの机に置いてあつた注射器を左手で取る。針の先端を肉片にゅつくり指し込み、そしてゆつくりと清龍の肉片を吸い上げた。肉片は見る見るうちに注射器の中に収まつていぐ。

「やめて……」

手首だけでなく、体もぱたつかせる。しかし、びくともしない。「準備完了ですねえ。」

ケニーは嬉しそうに、優記に向かつて1歩1歩近づいてくる。

「お願いやめて……」

どんなに もがいても鎖は優記を離さない。優記はあらゆる関節を使って最後の抵抗をみせる。

「どんなことでもするから、お願い……。」

懇願するように叫ぶ。ケニーはニヤリと微笑み、「では私の為に、大人しく実験台になつてくださいねえ。」と言い放った。

(いや……)

1歩、また1歩と足音が近づく。いつの間にか優記の体はまた硬直していた。

(いやだよ……)

さつきよりも、確実に1歩優記の前に。

(なんで私が……)

気がつくと、すでにクモ男の顔が目の前に。

(いやだよ……)

クモ男の吐息が耳に響く。

「死にたくないんだよ……」

【グシヤ】

注射針は、優記の右手の甲に突き刺さった。ケニーからタメ息が漏れる。

「やつてしましました。あなたがあんまりも うるさく喚く動くものだから、変な場所に刺してしまいました。でもまあ、腕でも手の甲でも何処でも一緒でしようかねえ。」

そう言つと、ゆっくり中身を優記の体に注ぎ込む。

「あつ・・・あつ・・・あつ・・・」

痛い。叫びたくなるほど苦痛が優紀を襲う。

痛みや恐怖なら、イジメで嫌といつほど味わつた。耐え切れないほど我慢した。なのに、優記の瞳からは悲しみの涙が零れ落ちた。（あつい。くるしい。息が出来ない。どきれどきれ息をするのが、精一杯だ。）

### 【カラーン コロン】

注射器が床に落ちた。肉片は全て、優記の体の中に入つていた。

「さて、どんな反応が起きるんじよつかねえ。」

ケニーが満面の笑みで実験台観察する。モルモット

優紀は体が熱くなり、思わず目を閉じた。

（はつ・・・はつ・・・苦しいよ。・・・何？・・・・・・体が熱い、体が痛い・・・やばい・・・頭痛が・・・目まいが・・・吐き気が・・・・・・）

### 【ドカーノン！】

次の瞬間、けたたましい爆発音とともに一瞬で部屋中が光に包まれた。

「あやーー！」

まだ爆音の余韻が残る中、優紀は爆風で吹き飛ばされて地面に叩きつけられた。

煙が徐々に晴れて視界が戻る。

「・・・・・。」

優記がゆっくりと起き上がった。何が起きたのか分からず、ただただ右足に激痛が走った。

「痛い。」

右足の上に大きなコンクリートの塊がのつていた。急いでどかそうとして、手錠の鎖が両方とも切れていることに気づいた。周りを見回すと、テーブル、カプセル、試験管、壁・・・部屋中が所々に壊れていた。そして、目の前には瓦礫の山に埋まつたケニーの姿が！ケニーは天井からの大きな壁の瓦礫によつて、体の半分が埋まつていた。

「逃げなきや。」

ゆっくりと、両手両腕を軽く動かしてみる。

（動いた。まだ生きてる。でも、ここにいたら殺される。）

優記は右足にのつたコンクリートの塊を取り除いた。そして急いで奥の部屋へと走つた。

「くそが・・・」

優紀の去り際、ケニーの口が開いた。

「くそやろう！――だから嫌いなんだよ、こんな世の中。」

ケニーの目には今までにない程の怒りが滲み、遠くなつた優記の後姿を睨みつけた。

「絶対に逃がしませんよ、清龍。そしてあのクソ女。見つけたら八つ裂きにしてくれるわ！――」

「はあ。はあ。はあ。」

当たり前だが、息がまだ荒い。意識も朦朧とするし吐き気もある。手の甲までなんだか熱い気がする。

だるい。苦しい。辛い。最悪。優記はありとありゆる最悪の場面での感情を心の中で繰り返した。それでも、足を引きずりながら懸命

に部屋から部屋へと彷徨つていた。迷路のようになつて研究所から一刻も早く家に戻る為に。

「どこに行くつもりなんですかねえ。」

いきなり声がして後ろを振り返る。すると、数十メートル後にケニーの姿が見えた。通路の真ん中でたたずみ、優紀のひきずる右足を見据えていた。

「なんて醜いんでしょうねえ。一度は自分からその命を投げ出しておいて、なおも必死で生き永らえようとする。そんなあなたに、もう一度この世を生きる資格なんてないはずでしょう。」

そしてケニーは蔑むように言い放つた。

「あなたには、あの世がお似合いなんですよ。」

優紀は首を横に振った。

「例えそうだとしても、私は帰るんだ。」

「可笑しなことを言う方ですね。」

あなたの帰る場所なんて何処にもないはずだ。さあ、早く戻つて下さい。そうすれば実験台モルセットとして、一生可愛がつてあげますからねえ。

ケニーが両手を広げ、そして吠える。

「さあ、さあ、さあー！ー！」

その声を同時に、ケニーに背を向け全力疾走で走り出した。

「あんの クソ女があー！ー！」

ケニーの顔がみるみるうちに真っ赤に染まる姿が優紀の頭に浮かんだ。【ドス ドス ドス】という足音が優紀を背後から追いかける。

「確かに私の帰る場所なんてない。」

足を引きずりながらも走る優紀の脳裏に、学校のクラスメイトや酒におぼれる父親の姿。それに 何を言つても聞く耳持たない担任教師や、ずっと親友だと思っていたのに 突然裏切られた幼馴染の姿が浮かぶ。

「でも、それでもわたしはまだ、まだ生きたいんだ！」

そう叫んだ優記の瞳から、自然と涙が溢れる。

不思議だな」と、優記は思う。学校や家で嫌なことがあつたり、思い通りにいかなかつた時には「死にたい、死にたい」って心で唱えると気持ちが楽になつた。でも今は違う。「生きたい、もつと生きたい」って心中で叫ぶと、なんだかパワーが湧いてくる。そして何より、「絶対に死にたくない！！！」

じゃあ、戦いなよ

「つ！？」

逃げてばかりじゃ始まらないよ

優記は立ち止まって辺りを見回した。誰？ケニーの声じゃない。もつと若くてキレイな声が、耳からとくに直接、脳に聞こえてくる。

【ガシャン】

物音に驚き振り返ると、ケニーが全力疾走で追いかけてきていた。このままだと確実に追いつかれる。やばい、そう思つてまた走り出そうとした瞬間、

また逃げるの？

優記はまた辺りを見渡し、どこにいるかも分からぬ声の主に問いかけた。

「誰なの？」

逃げてるだけじゃ、何の解決にもならないよ。時として人は、立ち向かわぬきやいけないんだ。立ち向かつて自分の居場所を勝ち取らなくちゃ

「戦つて、勝ち取る？」

『戦つ』『勝ち取る』。それは優記には無縁の言葉だった。その言葉を、優記は心中で繰り返してみる。  
(戦つて、勝ち取る。)

「お前の席はここには無いんだよ。」「

1人の男子が笑いながら言つた。私の机がなくなっている。あたりを見回してもない。ベランダを見ると私の机が無残に転がっていた。私はそれを1人で教室の中に入れる。「はつはつはつ！！！」男子の笑い声が聞こえる。「クスクスクス・・・」女子の潜めるような嘲笑も聞こえる。しかし、誰も目を合わせてくれない。ただ、嘲るような笑い声だけが聞こえる。

「いじめられてる？そんなバカな！」

担任の先生が大げさに驚いて言った。「何かの間違いだろ。」「うちのクラスにはそんなやついないだろ。」「ううん・・・でもなあ。証拠もないのに決め付けるのは。」「1回よく話し合つてみたらどうだ。」そして、最後は結局ここにたどり着く。「もしかしたらお前にも原因があるんじゃないのか？それに、お前ちょっと暗いぞ。もっと積極的にクラスの中に」意味のない言葉がますます私を悲しませる。

「学校へ行きたくないだあ？・・・お前なんかどつか行つちまえ！」

夕飯の場で父親が怒鳴る。「俺が、どんだけ苦労してお前の学費を稼いでると思ってるんだ！それなのにその苦労を無駄にしやがって！」父親の拳骨（ゲンコツ）が飛ぶ。母さんが必死に私をかばう。でも。「お前なんかクズだ。どこでも、好きなところにいちまえ！そしたらもつと家計も楽になつて、お前の弟だつてこいつえらんヴァふいえ」父親の怒鳴り声は途中から変な呪文に変わる。お酒のせいだ。そう思つ。

誰かに助けを求めてばかり。そんなことわかってる。だけど、誰かが困つてたら助けるのが普通だろ！！つて、みんなを恨んで軽蔑してた。けど、わたしあはかやつた？私自身、ただ助けを求めただけ。

子どもだから、大人に助けられるのが当たり前だと思つて、守られるのが当たり前だつて思つて、助けられるのを待つだけだつた。傷つくるのが恐い・・・だから逃げる。でも、戦つたら・・・もしわたしの意志で、わたしの力で戦つてみたら、戦えたら・・・今のこの状況を打破できるのだろうか。

「いじめなんてしやがつて、この卑怯者！…男なら正々堂々、1対1でかかつてこいよ！」

笑いこける男子に言い放つた。

「それでも教師か！人が困つてゐるのにそれを助けようとしないなんて、あんたなんかに教わることは何もない！もつとちゃんと生徒を見ろよ！…」

くどくどと、訳のわからない説教ばかりする担任に言つた。

「それでも親か！いつも酒を飲んで、酔いつぶれて母さんに迷惑ばかりかけて。親だったら、子どもの手本になるような努力をしろよ！…」

ロレツの回りになくなつた父親に叫んだ。そして。

優記は田の前を真つ直ぐに前を見つめた。その瞳に逃げ道はない。

ただ、全力疾走で走る怪物の姿だけが写つていた。ケニーは顔を紅潮させ、右手にはいつ持つたのか分からない1mほどの巨大な斧を持つている。一瞬優紀の足がすくんだ。体が震えた。胃が痛い。心臓が破裂しそう。だけど、だけど・・・。優紀はもう1回強くケニーを睨む。ケニーは優記の数メートル前で失速し、そして立ち止まつた。

「やつと諦めたのでしょうかね。それともその顔・・・まさか、たかが人間の小娘がわたくし相手に勝てるとでも御思いなのでしょう

かねえ。武器も何にももつてないのに。さては頭でも打ったんでし  
ょうねえ。」

息を切らしながらケニーが嘲笑った。しかし瞳の奥は烈火のように  
燃え、眼球は優紀を睨んで離さない。そして、長く鋭い斧を振りか  
ざして、一直線に優記に突っ込んできた。

「わたしは　」

優記の右手の甲が光った。

「わたしは　」

クモ男が近づいてくる。

「わたしは　」

優記の顔の2倍はあるであろう刃先をつけた斧が振り上げられた。

「わたしは　」

「お死になさい。」

巨大な斧が、優記めがけて振り下ろされた。鋭く尖った先端が、優  
紀の頭上目掛けて進んでくる。

「わたしは、絶対に逃げない！！！」

【ズシヤ！－！】

マンガの中ならば、背景にそんな文字がでかでかと貼り付けられる  
だろう。優記の瞳には、おびただしい量の“緑色”的血が噴射する  
のが映つた。

「わたし　」

優記は自分の目を疑つた。自分の右腕と手首が想像で描いていた  
清龍の鍵詰めそつくりに変形していた。そして、鍵詰めの中央には  
くつきりと光り輝く龍の紋章が刻まれていた。

「わたし、戦つたんだよね。」

そう呟くと、優記は静かに目を閉じ地面に倒れこんだ。

「本当にこれでよろしかつたのでしょうか？」

摩天楼と呼ぶに相応しい高層ビルが立ち並ぶ上空で、美しく綺麗で

背の高い女性が問いかけた。その女性の隣には、一人の少年が立っていた。その少年の右手の甲は夜だとのに辺り一面を十分に照らす程の光を放っている。そしてその光は、やがてロウソクの炎のようにすっと消えてしまった。

「どういう意味だい？」

少年が女性に問う。少年は頭からすっぽりとフードをかぶつてしまい、口と鼻を布で覆い隠している。外見から判断できるのは黒く光る両目と、細く整った両手だけだった。

「私には少し、遠回りのような気がしますが？」

女性の言葉に少年は微笑した。

「そうかもしね。やつぱりマナリアスは頭がいいね。でも、それがいいんだよ。わかるかい？」

マナリアスは首を横に振った。それを見て、少年が言葉を続ける。

「ボクは嬉しいよ。やつと、やつとのこの壊れた世界が動き出すんだからね。」

そう言い少年は星空が煌く夜空を見上げた。フードの下に隠れた顔が笑っているのか嘆いているのか、それはマナリアスにも分からなかつた。しかし、“この壊れた世界が動き出す”。それだけはマナリアスにも分かつた。

## 第1話 - 2（後書き）

初めて自分以外の人に読んでもらうので、とても緊張しています。長々と書いてしまいましたが、最後まで読んでいただけると嬉しいです。ストーリーは少女が異世界に迷い込み、元の世界に戻る為に旅をするという割りと横道な感じです。途中 優記と同じような朱雀、玄武、白虎使いが出てきたり、清龍を狙う敵が出てきたりします。今回は1話だけですが。

最近書き始めたばかりのド素人ですので、ぜひ皆さんのお意見を参考にさせていただきたいです。感想などもいただけると嬉しいです。よろしくお願ひいたします。

## △登場人物

### △登場人物

・ 笹本優記：この物語の主人公。高校1年生であり、クラスメイトからひどいイジメを受けている。また父親は極度の酒乱であり、母親と弟と共に辛い人生を送ってきた。学校の校舎から飛び降りたのをきっかけに、“この壊れた世界”にたどりつく。

・ ケニー・グローリー：人とモンスターの間に生を受けた“新種族”である。新種族の中でも名高い“名門貴族 グローリー一族”的生まれながらも、研究に没頭するあまり一族を追放される。その後も、自身の研究所で一人研究に没頭する。気絶していた優記を崖から救出し、清龍を再生させる為に実験台に使おうと企んでいた。

・ 清龍：四聖獣の中でも最速の攻撃と切れ味を持つ聖獣。属性は水。再生能力が非常に強いため、ケニーに与えられた実験台に注入されても一瞬で実験台を灰にしてしまう。理由は不明だが優記との融合には成功した。

・ 謎の少年：フードをかぶり、口と鼻を布で覆い隠している。外見から判断できるのは両目と両手だけ。テレパシーに似た能力で、どこにいても優記と自由に話すことが出来る。また優記の見た映像を共有することも出来る。

・ マナリアス：背が高く、美しく綺麗な女性。基本的には少年の命令に従い、時には少年の剣となり盾となり戦うこともある。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9527j/>

---

四聖獣ストーリー

2010年10月9日23時50分発行